



Title	Enacting Black Suffering and Laughter : Creative Restorations of Black Experiences in Suzan Lori-Parks's Plays
Author(s)	穴田, 理枝
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55628
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 穴 田 理 枝 ）	
論文題名	Enacting Black Suffering and Laughter: Creative Restorations of Black Experiences in Suzan-Lori Parks's Plays (黒人の苦しみと笑いを演劇に―スーザン＝ロリ・パークス劇における黒人の経験の創造的な修復)
<p>論文内容の要旨</p> <p>スーザン＝ロリ・パークスは、アフリカ系アメリカ人のこれまで無視され、言わば地中に埋められてきた声を掘り起こし、舞台化してきた。その中で彼らの伝統的な修辞法としての「シグニファイ（イング）やジャズにおける「リフ」の形式である「反復と修正」を加えることにより、様々な形で「歴史についての歴史」、「文学の歴史」に疑問を投げかけている。過去から現在までの「アフリカ系アメリカ人の経験」を直線的にではなく、時空を超えて立体的に描くパークスの演劇は「ポストモダンの」とも評される。しかしそれだけでなく、アフリカ系アメリカ人の伝統でもある「サヴァイヴァルのためのユーモア」もまた、パークス劇の重要な要素である。ユーモアと苦難を伝える言葉を取り混ぜ、建築物の設計図を描くように組み立てられたパークス作品は、アフリカ系アメリカ人の歴史の埋もれた歴史を掘り起こすだけでなく、様々な素材を組み合わせて創造的に修復するものであると考えられる。本論の目的は、パークスによるアフリカ系アメリカ人の歴史修復の過程を検証すると同時に、演劇という枠組みの中で彼女が描こうとする諸問題をも明らかにしていくことである。</p> <p>第1章では、パークスの初期の代表的な作品である『第三王国で感じられない変化』、『全世界における最後の黒人の死』、『アメリカ・プレイ』の3作品を取り上げ、そこに登場する、奴隷貿易の時代から現代までの、白人のアメリカに翻弄され続けるアフリカ系アメリカ人の姿に注目する。初期演劇作品に描かれるのは、まず、白人主導のアメリカで自己を確立することを阻まれるアフリカ系アメリカ人達が、社会の周縁に置かれ、死後もそのまま放置される姿である。パークスは「今、ここ」の劇場で彼らの死を看取る作品を上演し、具体的に演劇作品を「歴史を作る」場と成している。これらの作品を通じて描かれるのは歴史性そのものであり、「今」が歴史である、という観点だといえる。また、『アメリカ・プレイ』で「歴史のテーマ・パーク」として描かれる、アメリカにおける歴史のディズニー化についても論じる。</p> <p>第2章では、パークスが従来の手法に加えて、劇中劇、ギリシャ悲劇的なコーラス、プレヒト劇的な劇中歌などを効果的に取り入れ、過酷な状況を生き抜こうとする黒人女性の物語を演劇化した、1990年代後半からの作品について論じる。実在のアフリカ人女性を主人公とし、ブロードウェイでの高い評価を得た『ヴィーナス』と、ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』のリフとして書かれ、併せて『赤い文字の劇』とされた『血だまりの中で』『ファッキングA』の3作品である。パークスの取り入れた新たな演劇手法について確認しつつ、これらの作品に描かれる人種、性を中心に論じる。それらは歴史的に「他者」として周縁化されてきた黒人女性の姿をセンター・ステージに配し、そのような立場に彼女たちを追いやる社会を告発する物語なのである。</p> <p>第3章では、近年のパークス作品に描かれる「アフリカ系アメリカ人と家族」を中心に論じる。まず、ピューリッツァー賞受賞作、『トップドッグ/アンダードッグ』の中でパークスの描くアフリカ系アメリカ人の家族の物語を、アメリカ社会の現実と照らし合わせながら読み解く。また、最新作、『父が戦争から帰還する 第1部、2部、3部』は、今後第9部まで続くサイクル・プレイの幕開けとなる作品である。南部の奴隷であった黒人達が、南北戦争という歴史転換期にどのように「自由」と向き合い、自ら家族を形成しようしていくのかに注目し、論じる。</p> <p>結論として、パークス劇における歴史の修復作業について、その意味を再確認する。彼女が目指すのは、白人主導のアメリカ社会の中で築き上げられてきた「正史」を打ち壊し、その素材を生かしながらも、新たにアフリカ系アメリカ人の物語を組み込むことを可能とする、複合的な歴史を創造する場を今、ここで積み上げていくことである。また、商業的演劇の枠を超えた新たなパフォーマンスのあり方を提案し、演劇以外にも映画、音楽、小説といった、様々なメディアを使って発信し続けることで、パークス自身がアフリカ系アメリカ人の歴史を絶えず更新している存在ともなっている。彼女自身が、このような創造的な修復作業を行うことのできる能力を示し続けることが、アフリカ系アメリカ人の未来、そしてアメリカ演劇の未来を切り開くことになるだろう。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (穴 田 理 枝)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	言語文化研究科教授 貴志 雅之
	副 査	言語文化研究科教授 渡邊 克昭
	副 査	言語文化研究科准教授 中村 未樹
	副 査	言語文化研究科教授 畑田 美緒
	副 査	言語文化研究科講師 岡本 淳子

論文審査の結果の要旨

本博士号請求論文“Enacting Black Suffering and Laughter: Creative Restorations of Black Experiences in Suzan-Lori Parks’s Plays”は、現代アメリカ演劇を牽引するアフリカ系アメリカ人女性劇作家スーザン＝ロリ・パークスの劇作行為を初期から21世紀の最新作に渡って分析・検証した優れたパークス研究である。日本において、パークスのドラマトゥルギーと作品を包括的に論じた個人研究は皆無と断言していい。それは1980年代より現在まで多様な要素・様式を取り込みながら、常に変化に富んだ先進的・独創的演劇作品を創造し続けるパークスの劇作と作品が、演劇批評による固定化を阻む流動性・可変性を有するからである。演劇、小説、映画、音楽などジャンル横断的に斬新な作品を発表し続けるパークスの包括的研究の発表・刊行に、少なからぬ日本の研究者が二の足を踏むのはそのためである。

穴田論文の独自性は、「黒人の苦しみと笑いの再現」に焦点を据え、初期から今に至るパークスの劇作活動を、作品テキストの丹念な読みとパークスの演劇理念と実践の再検証、文化・社会・演劇研究の観点からの多様な文献資料に関する検証によって、パークス演劇の包括的研究に果敢に挑戦した点にある。本論文は、アフリカ系アメリカ人の言語・音楽文化の伝統的表現方法を取り込んだパークス独自の創造的演劇手法のあり方と効果を入念に検証・分析する。そのプロセスの中で、「歴史についての歴史」のあり方が問い直され、過去から現在に至る「アフリカ系アメリカ人の経験」が脱構築的に再創造されていく。論者は、このアフリカ系アメリカ人の歴史再創造プロセスに人種・民族的生存戦略として「サバイバルのためのユーモア」を抽出し、「黒人の苦しみと笑い」をパークスの歴史修復・再創造の核として位置付ける。本論文は、パークスの演劇創作の営為を創造的修復（Creative Restorations of Black Experiences）と捉え、最新作に託されたサイクル劇構想が照射する黒人史創造のあり方を精緻な分析によって予見する。アフリカ系アメリカ演劇の文化・伝統を継承しつつ、新たな黒人演劇の可能性を発信し続けるパークスの劇作の根幹を見定め、体系化しようとした野心的な労作として本博士論文は高く評価される。

本論文は序論と結論を含め全5章から成る。序論では本論文の主旨・目的が示される。つまり、パークスは“signifyin(g)”（シグニファイイング）や“riff”（リフ）による“rep & rev”（反復と修正）というアフリカ系アメリカ人の言語音楽文化伝統に根ざした独自の創造的演劇手法によって、白人の支配的言説による「歴史性」、「歴史についての歴史」を脱構築するとともに、歴史に埋もれたアフリカ系アメリカ人の声を掘り起こす。そして、発掘した過去の黒人体験の断片を新たに組み換え、組み合わせ、アフリカ系アメリカ人の歴史を新たな形で創造的に修復する。序章では、パークスによる創造的歴史修復過程を検証するとともに、作品で提示されるアフリカ系アメリカ人を巡る問題系を明らかにするという本論文の基本的姿勢が打ち出される。そして、初期代表作から最新作に至るパークス演劇の通時的分析によって、パークス演劇の根幹的な特質を解明するという本論文の意図と構成が各章ごとの要約を持って提示される。

第1章は、パークス初期の代表作である『第三王国で感じられない変化』（1989）、『全世界における最後の黒人の死』（1990）、及び『アメリカ・プレイ』（1994）の3作を取り上げる。この章では、

奴隷貿易の時代から白人支配のもとで自己確立を阻まれ、周縁化されて世を去ったアフリカ系アメリカ人の骨と声を発掘し、劇場空間で「今」、現在進行形の歴史として再現するパークスの歴史修復行為が、精緻な分析により論証される。「劇場が歴史を創り上げる完璧な場」とするパークスの演劇理念の実践を、自ら根をおろす拠り所を見出せず、ノマド的存在とならざるを得ないアフリカ系アメリカ人の多様な体験を舞台化するドラマトゥルギーが鋭い洞察によって描出される。特にリンカーンに瓜二つの黒人墓掘が「歴史の大穴」のレプリカと称される巨大歴史テーマ・パークで白人大統領リンカーンの暗殺場面を日々再現する『アメリカ・プレイ』の考察では、先行研究の知見を十分に踏まえた視座から、ディズニー化（Disneyfication）＝テーマ・パーク化したハイパーリアルな国家的歴史のシミュラクル的神話構築のメカニズムを可視化、脱構築する説得性ある議論が展開する。

第2章では、舞台化されるアフリカ系アメリカ人女性の物語性を焦点化し、1990年代後半から2000年にかけての問題作3作が論じられる。劇中劇、ギリシャ悲劇的コーラス、プレヒト演劇的な挿入歌、女性間で交わされる暗号的特殊言語TALK等を導入して演劇化される黒人女性物語のドラマトゥルギーと作品が提示する問題系が詳述される。まず、19世紀アフリカからヨーロッパに連れて行かれ、植民地主義支配の象徴的見世物として扱われ、ホッテントット・ヴィーナスと呼ばれた実在のアフリカ人女性サールタイ・パートマンをモデルとした『ヴィーナス』（1996）では、人種的他者の劣等性と白人支配の正当性を合理化する西洋啓蒙主義と植民地主義の実態と、その力に翻弄されながら、意図せず自ら共犯関係を結んで性的、医学的、政治的に領有されたヴィーナスの姿が舞台に再現される。ここでは、ヴィーナスの人種的・人間的復権を図るパークスの演劇実践とともに、その実践が歴史的アイコンであるヴィーナスに対する歪曲的客体化だとしてパークスを植民地主義の共犯者として批判する声を取り上げられ、埋もれた歴史を可視化するパークスの演劇実践を巡る問題が実証的に論じられる。また、ナサニエル・ホーソーン『緋文字』のリフとして創作された『血だまりのなかで』（1999）と『ファッキングA』（2000）の考察では、貧困にあえぐアフリカ系アメリカ人の母親ヘスターによる子殺しを描く両作品で、黒人女性を周縁化し、性的搾取と社会的暴力、そして経済的圧迫を加え、母親を子殺しへと向かわせる社会の構造的問題が丹念に精査される。

アフリカ系アメリカ人家族のあり方に着目した第3章では、まず白人大統領リンカーンの白人俳優ブースによる歴史的暗殺事件を、両親に捨てられたアフリカ系アメリカ人兄弟の弟ブースによる兄リンカーン殺しとなって再現される『トップドッグ/アンダードッグ』（2001）が論じられる。ここで論者は、白人社会の理想的家族像を互いに異なった形で内面化した兄弟の孕む問題を、ロレイン・ハンズベリーの『ア・レーズン・イン・ザ・サン』（1959）、トニ・モリソンの『青い眼が欲しい』（1979）との比較検討により分析するとともに、白人大統領リンカーンを演じる兄リンカーンのパフォーマンスに見られる黒人のアイデンティティ問題を社会学的視点から入念に読み解いていく。

本章で取り上げられる2つ目の作品、『父が戦争から帰還する 第1部、2部、3部』（2014）は、日本でまだ本格的に論じられていないパークス最新作である。南北戦争中、南軍兵士として主人について戦場に赴いた奴隷ヒーローが、奴隷解放後の新たな自己を象徴するかのようにユリシーズと改名して、新しい妻とともに家族を作り上げていく。南北戦争に始まるアフリカ系アメリカ人家族を巡る全9部のサイクル劇当初3部を描いた本作に、論者はオーガスト・ウィルソンの全10作から成る「ピッツバーグ・サイクル」に比する新たなアフリカ系アメリカ人歴史物語の姿を読み取る。そして、このサイクル構想に過去の創造的修復による新たな歴史創造のメディアとしてのパークス劇の方向性を予見する説得性ある議論を展開している。

結論では、初期から最新作にわたるパークスの先進的ドラマトゥルギーと問題意識に関する検証作業を総括するとともに、支配的言説による正史の解体を図りつつ、アフリカ系アメリカ人の歴史を発掘し、更新し、創造していく場としての劇場・演劇というパークスの演劇理念と実践が改めて論じられ、アメリカ演劇及びアフリカ系アメリカ演劇の地平を切り拓くパークス劇の今後の探求の方向性を提示する洞察力に優れた議論によって本論文を締めくくっている。

以上のように、本博士論文は歴史に埋もれた祖先の声を発掘・修復し、アフリカ系アメリカ人の新たな歴史創造に向けたパークス演劇の営為とその特質を通時的かつ包括的に浮上させている。この点で、パークス研究の新たな一歩を刻む研究業績としての本論文の功績と意義は高く評価できる。

しかし一方で、今後に向けて解決すべき課題として、以下の問題点が審査担当者から提示された。本論文題目である“Enacting Black Suffering and Laughter”のうち、苦しみ・苦難に比べ、笑いとユーモ

アに関する議論が不十分である。副題の“Creative Restorations of Black Experiences”に示される歴史の（創造的）修復行為よりむしろ、白人の支配的歴史・歴史言説の脱構築による黒人史の反復的修正・再創造ではないか。参考文献及び作品テキストの引用箇所に関する考察・議論はさらに展開する余地がある。作品中の挿入歌をプレヒト的異化効果があるものと論じるには問題がある。あるいは批評理論のさらなる援用が求められる指摘もあった。

しかし、以上の指摘は、本論文のさらなる発展にとって重要な修正箇所を示すものであっても、本論文の学術的価値を減じるものではない。審査員全員一致の見解として、本論文がアフリカ系アメリカ人の問題にかかわる文化・社会的・歴史的コンテクストを踏まえ、パークスの演劇理念と作品創作の実践を丁寧に検証し、日本初と呼びうる包括的パークス演劇研究をまとめ上げた点は大いに注目に値する。本論文の野心的研究企画、綿密なテキスト分析と先行研究の知見を踏まえた検証作業に裏打ちされた実証性、さらに洞察性に優れた議論は、パークス研究の先進的研究として十分評価できるものである。また、論者は日本アメリカ文学学会全国大会、日本アメリカ演劇学会等における4回の口頭発表において高い評価を受け、大阪大学『英米研究』でもパークス研究の論考が掲載されている。本博士論文は論者のこれまでの研究業績を反映するとともに、さらに進展を遂げた論者の研究能力の証左となるものである。

以上から、本審査委員会は総合的に判断した結果、全会一致で本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するに値する研究であるとの結論に達した。